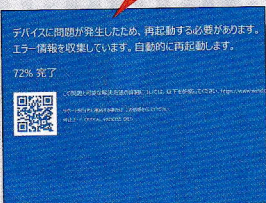


簡単リカバリーで遅さも不調も根こそぎ解消!

不調を丸ごと解消! すぐ絶好調に戻せる

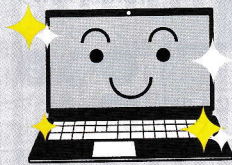
突然パソコンが再起動する



マウス操作ができない



アプリが「応答なし」



「簡単リカバリー」で即快適!

回復

このPCを初期状態に戻す

PCが正常に動作していない場合は、初期状態に戻す。個人用のファイルは保持するか削除するかを選んでからWindowsを再インストールできます。

開始する

「設定」画面

このPCをリセットする

オプションを選択してください

個人用ファイル保持する  
アプリと設定を削除しますが、個人用ファイルは保持します。

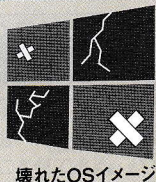
すべて削除する  
個人用ファイル、アプリ、設定をすべて削除します。

メニューを選択して進めればよい

図1 ユーザーの意思に関係なく突然パソコンが再起動したりマウス操作を受け付けなくなったりしたら、OSが深刻な不調に陥っている可能性がある。そんなときはOSの標準機能の「簡単リカバリー」を試したい。不調を丸ごと解消して購入時のような快適な状態に戻せる

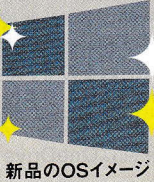
簡単リカバリーをしてもデータを残せる

メリット①



壊れたOSイメージ

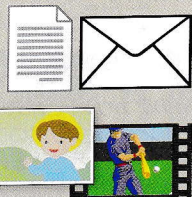
リカバリー後



新品のOSイメージ

出荷時の状態に

メリット②



保存したデータ

リカバリー後



そのまま残る

バックアップ不要

図2 簡単リカバリーの主なメリットは、OSを再インストール(初期化)して新品同様のクリーンな状態に戻せることだ。深刻な不調を抱えていても、OSが起動さえすれば実行できる。また、文書や写真、パソコン内に保存されたメールなどの個人用ファイルはリカバリー後も消えずに残る。手間のかかるバックアップ作業が不要だ

「パソコンが勝手に再起動する」「マウスポインターが反応しない」などの症状の際は、ウィンドウズが原因不明の不具合に陥った可能性がある(図1)。そんな状態が続くと最悪パソコンが起動しなくなる恐れもある。そうなる前に「簡単リカバリー」を実践したい。あ

「個人用ファイルがすべて残る」  
簡単リカバリーは革命的!?  
簡単な不具合を一掃し、パソコン購入時のような快適な状態に戻せる。  
簡単リカバリーは本誌が命名したウィンドウズを手軽に再インストール

(初期化)する方法。ウィンドウズ10はCドライブ内にOSを再構築するプログラムを備えており、それを利用して古いOSをまったく異なる状態に置き換えとセキュリティに留意されている「回復」機能を使って実行する。

特筆すべき点は、エクセルやワードなどで作成した個人用ファイルを残せること(図2)。ユーザーにとつて最も大事な財産を守ることができる。ただし、自分でインストールしたアプリはすべて消えるので、これらのアプリの再インストール作業が発生する。

気になるのはパソコンメーカーが提供するリカバリーと簡単リカバリーのどちらを使えばいいのかという点。使用中のパソコンがどちらも実行できる状態なら迷わず簡単リカバリーだ。メーカーリカバリーは、OSと一緒に個人用ファイルも削除してしまうことが多い(図3)。さらにウィンドウズ10にアップグレードしたパソコンは7や8・1に戻ることもある。個人用ファイルをバックアップしたり、10にアップグレードし直したりと、1日がかかりの作業になってしまう。

一方で、簡単リカバリーは個人用ファイルを残すだけだけでなく、初期化前の10のバージョンのまま使い始めることができる。操作もメーカーや機種に依存せず、どのパソコンも同じ。図1左下で示した「このPCを初期状態に戻す」から実行できる。

何が消えて、何が残るの?

簡単リカバリーの疑問を解消

簡単リカバリーの仕組みをさらに詳

[注]ここでは、メーカーが提供する「リカバリーディスク」や、メーカー製ツールを使って作成した「再セットアップメディア」などを使用してパソコンを購入時の状態に戻す作業を「メーカーリカバリー」と呼んでいる

## メーカーリカバリはもはや時代遅れ!?

	メーカーリカバリ	簡単リカバリ
実行後のOS	出荷時の状態	実行前と同じ
個人用ファイル	消える	残る
ユーザーアカウント	消える	残る
設定	消える	一部残る
標準アプリ	出荷時の状態	出荷時の状態
インストールしたアプリ	消える	消える
実行時間	長い	メーカーリカバリより短い



図3 簡単リカバリとメーカーリカバリを比較した。メーカーリカバリはアップグレードした10パソコンで実行すると8.1や7に戻ることがある。そこから再びアップデートして最新の10にするのは膨大な時間がかかる。また、リカバリ用のDVDやストレージ内の専用領域が消えると実行できなくなる。簡単リカバリなら初期化後も以前と同じ10のまま使い始められ、トラブルも起こりにくい【注】

しく見ていこう。Cドライブ内のフォルダーの変化を実行前と実行後とで比較するとわかりやすい。  
Cドライブ直下にはウィンドウス本体や設定情報などを保存する「Windows」フォルダーと、インストールしたアプリを保存する「Program

## 「ユーザー」は残る! OSやアプリは初期状態に

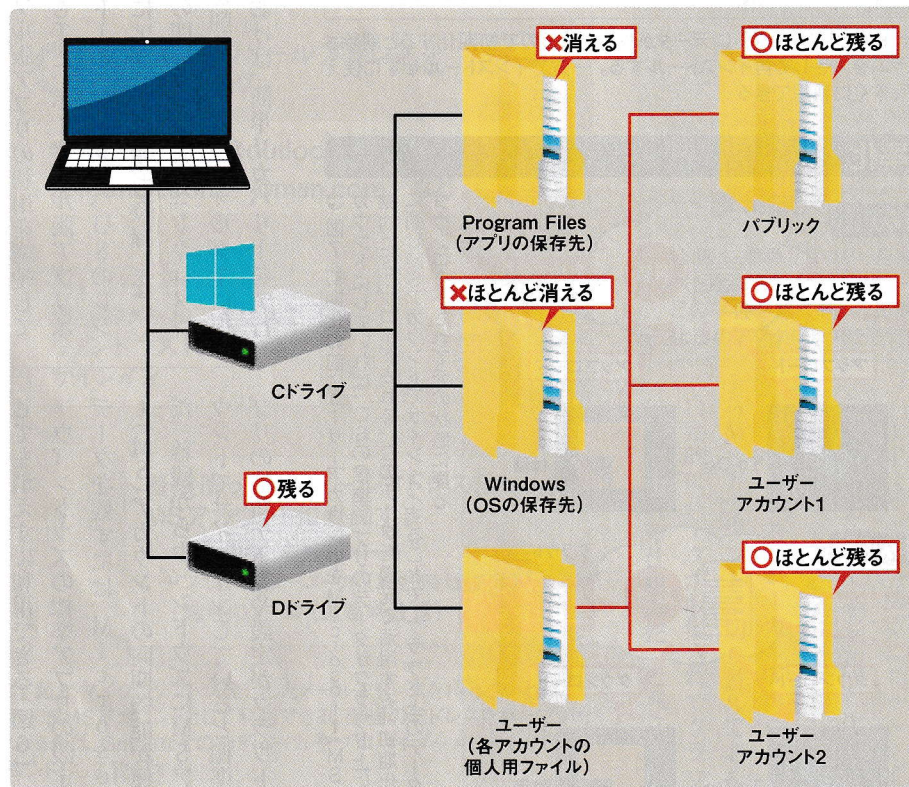


図4 簡単リカバリの実行後は「Windows」や「Program Files」フォルダーの中心が初期状態に置き換わるため、自分でインストールしたアプリや設定情報はすべて消える。一方で個人データの保存先である「ユーザー」フォルダーはほとんど影響を受けないため、大部分のデータが残る。

m Files」フォルダーがある(図4)。初期化をすると古いアプリや設定情報を記録したレジストリなどが削除され、新品に入れ替わる。これによってOSとアプリは初期状態に戻る。  
一方で「ドキュメント」や「ピクチャ」などが入っている「ユーザー」フォル

ダーや、1つのHDDをパーティション分割して作ったDドライブは削除の対象外だ。個人用ファイルが残るのは、保存先が削除対象に含まれていないためだ。  
図5は、実際に簡単リカバリを実行した後に、重要なデータを対象とし

## あのデータや設定は消える? 消えない?

ユーザーアカウント	○残る
メーカーのプリインストールアプリ	○残る
自分でインストールしたアプリ	×消える
Wi-Fiの接続情報	○残る
プリンターのドライバーソフト	×消える
Edgeの「お気に入り」	×消える
Outlookのメール (IMAP)	×消える

図5 簡単リカバリの実行後の詳細をまとめた。ユーザーアカウントは残るので新たに作成する必要はない。OSの標準アプリとメーカーのプリインストールアプリは再インストールされる。自分でインストールしたアプリやドライバーは消える。Edge (エッジ)の「お気に入り」などは原則消えるが、図8の方法で復活させることが可能だ

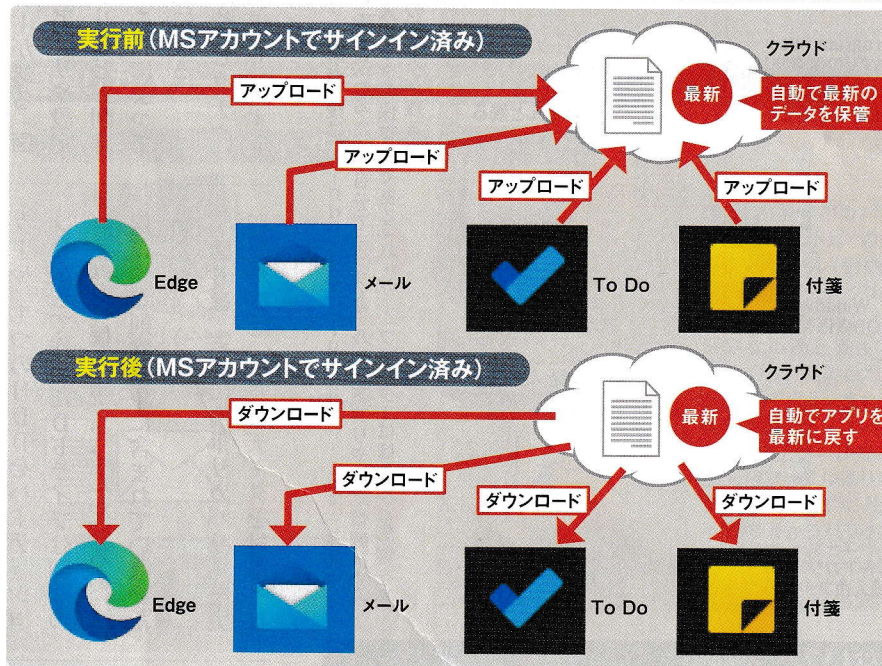
て、何が消えて何が残ったかを調べたものだ。Wi-Fiの接続情報は残ったが、プリンターのドライバーソフトは残念ながら消えた。ブラウザーのEdge (エッジ)に記録した「お気に入り」も消えた。ただし、これに関しては簡単にバックアップする方法があり、初期

## ポータブル版のアプリなら消えずに残る



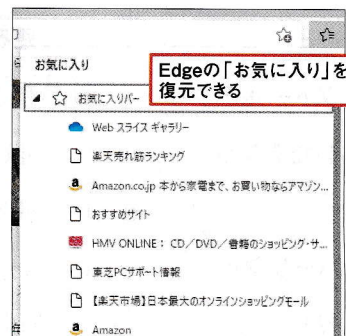
④ 図6 自分でインストールしたアプリは「Program Files」フォルダーにデータが保存されるので初期化すると削除される(図4参照)。それらは提供元サイトからプログラムを入手して再インストールする。一方でインストールせずに使えるポータブル版アプリは初期化しても消えないので、すぐに利用できる

## MSアカウントを使って復元を効率化



⑤ 図7 初期化の前にユーザーアカウントをMicrosoft(MS)アカウントにしていれば、OSの標準アプリのデータがクラウド上に自動的にアップロードされる。このデータを復元で活用する。初期化後と同じMSアカウントでサインインすることで、クラウド上のデータがダウンロードされて元の状態に戻る

アプリ	復元される主な内容
To Do	入力したToDo(今すべきこと)の内容
Edge	「お気に入り」に登録したウェブサイト
カレンダー	入力したスケジュール
Cortana	Cortanaに質問した内容
Skype	連絡先のリストやチャットのやり取り
付箋	入力したメモの内容
メール	メールアカウントや送受信したメール



⑥ 図8 初期化してから再度MSアカウントでサインインすることで、Edgeの「お気に入り」や「メール」アプリのアカウント情報などが復元される。なお、MSアカウントにひも付いたサービスでも例外があり、OneDriveの接続情報は自動的に復元されないで個別にサインインする(→47ページ図19参照)

化後に復元できるので心配無用だ(図8を参照)。  
消えずに残せるアプリもある  
ポータブル版アプリの活用も  
今後、単リカバリーを積極的に活用したい人は、インストール不要の

ポータブル版アプリの利用を増やしていくのも手だ。ポータブル版アプリはインストール版と違って、OSのレジストリにアプリの情報を登録しない。アプリの関連ファイルを「ドキュメント」など削除対象外のフォルダーに保存しておけば、単リカバリーを実行

しても消えずに利用できる(図6)。ウィンドウズの標準アプリの設定やデータを残すには、Microsoft(MS)アカウントの同期機能が便利だ。普段からウィンドウズにMSアカウントでサインインしていると標準アプリの最新データや設定がクラウドに

自動保存される(図7)。初期化後に同じアカウントでサインインするとデータがダウンロードされて実行前の状態に戻る。Edge(エッジ)の「お気に入り」などが該当するので、標準のウェブブラウザにしているなら必ず実行しよう(図8)。

## MSアカウントかどうか確認

**ローカルアカウント**

Toru  
ローカル アカウント  
サインイン

**×** MSアカウントへの切り替えが必要

---

**MSアカウント**

佐藤徹  
@outlook.jp  
Microsoft アカウント

**○** ここでの操作は不要。図7に進む

図2 ユーザーアカウントの種類を確認するには「設定」画面を開く。画面の左上にアカウントの種類が表示されるので、ローカルアカウントであった場合はMSアカウントに切り替えよう。MSアカウントであれば操作は不要だ

## 手持ちのメールアドレスが使えるかも!?

Q いずれかのメールアドレスを持っている?

@outlook.jp / @outlook.com / @live.jp  
@hotmail.com / @msn.com など

持っている

持っていない

該当のメールアドレスで  
Windows10に  
サインイン

登録後

普段使っているメールアドレスを  
MSアカウントに登録する

- ・Gmailなどの無料メール
- ・プロバイダーメール（解約時は注意）
- ・職場のメール（退職時注意）

図3 マイクロソフトが発行したメールアドレスを持っていれば、そのままMSアカウントとして利用できる。該当のアドレスを持っていない場合は、Gmailなどの無料メールやプロバイダーメールをMSアカウントとして登録する

設定 ▶ アカウント ▶ ユーザーの情報

## ユーザーの情報

ローカル アカウント  
管理者

設定やファイルを自動的に同期すれば、Windows がさらに便利になります。Microsoft アカウントを使うと、あらゆるデバイスからすべての情報に簡単にアクセスできます。

Microsoftアカウントでのサインインに切り替える

図4 MSアカウントに切り替えるには、「設定」画面の「アカウント」を選ぶ。開いた画面で「ユーザーの情報」を選び、「Microsoftアカウントでのサインインに切り替える」をクリックする

## 必ずMSアカウントでサインイン

リカバリー編  
Recovery

簡単リカバリーの流れ

1 MSアカウントでサインイン

2 Chromeもアカウントでログイン

3 簡単リカバリーを実行する

リカバリー後の復元の流れ

4 MSアカウントでサインイン

5 OSのアップデートとセキュリティ対策

6 ドライバーとアプリを再インストール

7 Chromeにログイン

8 OneDriveは別途操作が必要

ここから始める

次パートで解説

図1 簡単リカバリーを実行するときは上の1~8のステップを順に進めよう。このパートでは設定をバックアップするなどの準備を進めてから初期化を実行する。次パートは初期化後のアフターケアで設定やアプリを復元する

前パートまでで簡単リカバリーのメリットや押さえておきたい基礎知識を解説した。ここからは簡単リカバリーによってWindowsを再インストールする具体的な方法を見ていく(図1)。

### MSアカウントでサインインしクラウドにバックアップ

まずは準備だ。Microsoft (MS) アカウントを利用し、アプリのデータや設定などをクラウド上にバックアップする。ローカルアカウントからMSアカウントに切り替えておくと、自動的にデータが収集されてクラウドに保存される仕組みだ。どちらのアカ

カウントでサインインしているかは「設定」画面から確認できる。アカウント名の下に「ローカルアカウント」と表示されていれば切り替えが必要だ(図2)。

その場合、手持ちのメールアドレスにMSアカウントがないか確認しよう。「outlook.jp」や「hotmail.com」などはMSアカウントなので新たに作る必要はない(図3)。該当アドレスがない場合は普段使っているプロバイダーメールやGmailをMSアカウントに登録すればよい。

MSアカウントへの切り替えは、「設定」画面の「ユーザーの情報」で「設

設定はクラウドに保存！簡単リカバリーの秘訣

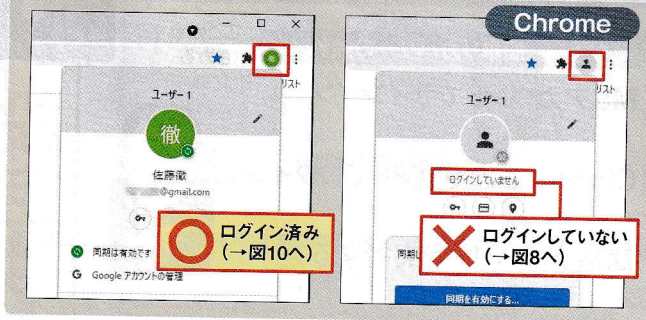
第2部

不調時でも諦めない！

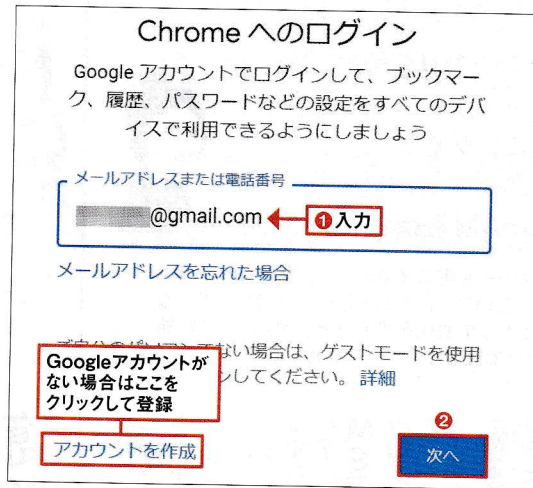
リカバリーで完全復活！

設定はクラウドに保存！簡単リカバリーの秘訣

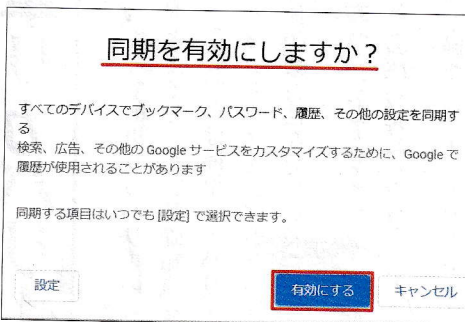
## Chromeの設定をバックアップ



⑦ 図7 Chromeの設定のバックアップ状況を確認するには、Chromeの画面右上にある人の形のアイコンをクリックしてポップアップ画面を表示すればよい。「ログインしていません」と表示された場合はバックアップされていないのでGoogleアカウントでログインする(→図8へ)。ユーザー名が表示されていたらログイン済みなので操作不要だ(→図10へ)

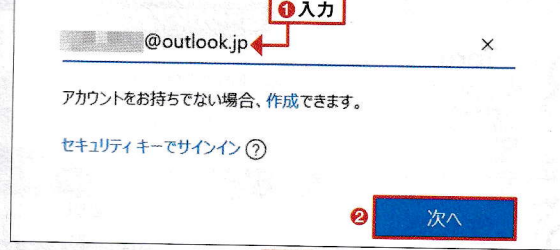


⑧ 図8 ログインするには図7右のポップアップ画面で「同期を有効にする」をクリックする。開いた画面でGoogleアカウントを入力し(①)、「次へ」をクリックする(②)。続く画面でパスワードを入力する

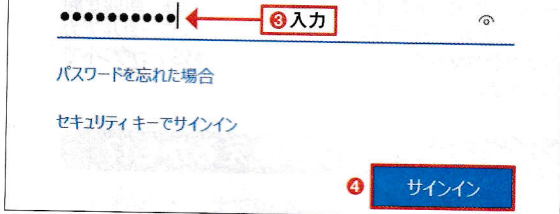


⑨ 図9 「同期を有効にしますか?」と表示されたら「有効にする」をクリックする。これで同期が実行され、Chromeの設定などが自動的に専用のクラウドに保存される

## サインイン

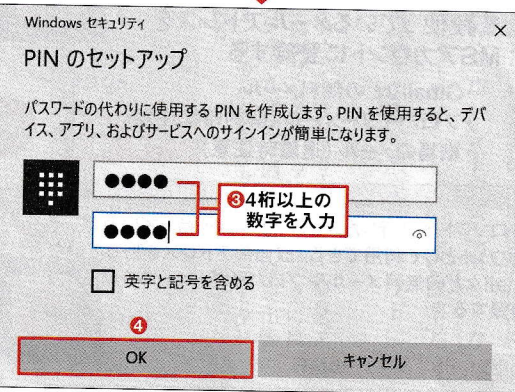
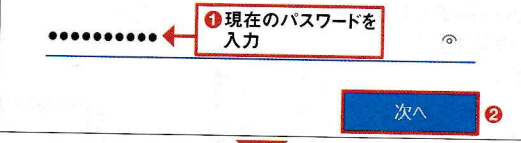


## パスワードの入力



## Microsoft アカウントを使用してこのコンピューターにサインインする

次回このコンピューターにサインインするときに Microsoft アカウントパスワードを使用するか、Windows Hello を設定している場合はそれを使用します。最後にもう一度、現在の Windows パスワードが必要になります。



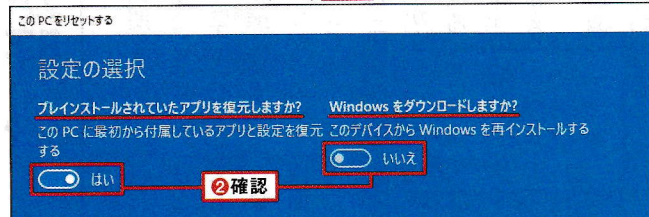
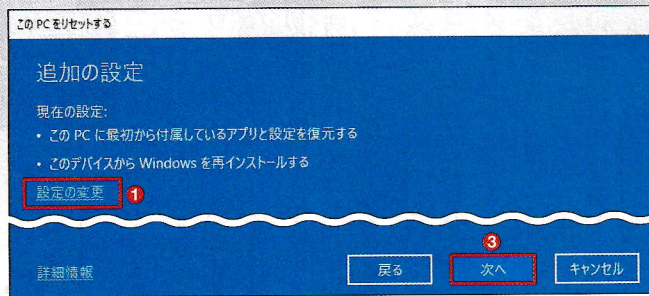
⑤ 図5 現れた画面で、手持ちのMSアカウントを入力して「次へ」をクリックする(①②)。続く画面でパスワードを入力して「サインイン」を押す(③④)【注】

⑥ 図6 現在のローカルアカウントのパスワードを入力してから「次へ」をクリックし(①②)、指示に従って操作を進める。「PINのセットアップ」画面では4桁以上の数字を入力し(③)、「OK」を押す(④)。PINコードは次回以降のOSのサインインに使うので覚えておく

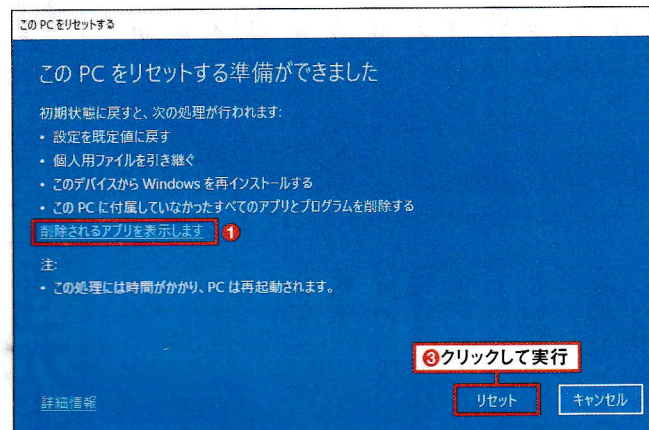
削除されるアプリを確認！  
初期化が始まったら待つだけ  
準備ができたなら初期化だ。「設定」画面で「このPCを初期状態に戻す」の「開始する」ボタンをクリックし、指示に従って進める(図10、図14)。  
再インストールの方法は「ローカル再インストール」を選ぶ。これによりバ

rosoftアカウントでの「」を選ぶ(前ページ図4)。現れた画面でMSアカウントとパスワードを入力すればよい(図5)。途中でPINコードが求められる。PINコードはOSのサインインでパスワードの代わりに利用する4桁以上の数字のことだ(図6)。  
ブラウザーにChrome(クローム)を使っている場合は、追加のバックアップが必要だ。シンプルカバリーによって、アプリだけでなく登録したブックマークなども削除されるからだ。ブラウザーは再インストールすればよいが、ブックマークや設定はバックアップデータがないと復元できない。  
バックアップは、Chrome上でGoogleアカウント(「@gmail.com」など)でログインしてクラウドに保存するのが簡単だ(図7)。「同期を有効にする」を選んでアドレスとパスワードを入力すればログインできる(図8、図9)。なお、Googleアカウントを持っていない場合は図8で「アカウントを作成」を選んでアドレスを登録する。

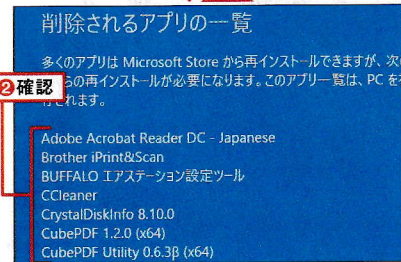
【注】手持ちのMSアカウントがない場合は、図5上の画面で「作成」をクリックし、指示に従ってメールアドレスを登録する。完了したら図4からの操作を繰り返してMSアカウントに切り替える



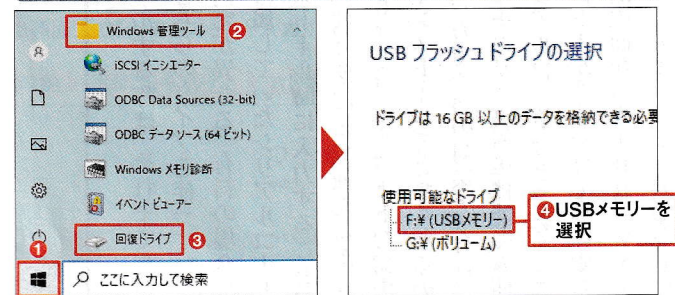
④ 図13 上の画面で「設定の変更」をクリックして、「プリインストールされていたアプリを復元しますか?」が「はい」、「Windowsをダウンロードしますか?」が「いいえ」になっているのを確認する(1)(2)。問題なければ画面下の「確認」を押して元の画面に戻り「次へ」を押す(3)



④ ④ 図14 「削除されるアプリを表示します」をクリックし、作業後に削除されるアプリを確認しておく(1)(2)。準備ができたなら「リセット」をクリックして初期化する(3)。あとは何もせずにウィンドウズのサインイン画面が表示されるまで待てばよい(→次ページ図2へ)



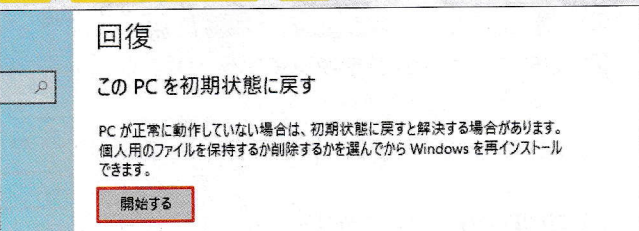
### 回復ドライブを作成しておく



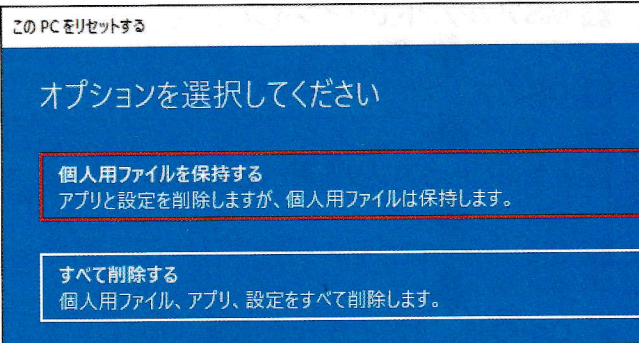
④ 図15 回復ドライブを作るときは、使っていないUSBメモリー(ここでは、容量16GB以上)を挿してからスタートメニューを開いて「回復ドライブ」を起動する(1~3)。USBメモリーを選び(4)、作成すればよい

### 簡単リカバリーを実行して初期化

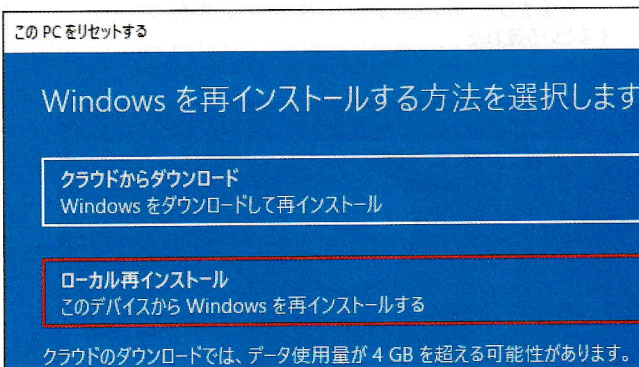
設定 > 更新とセキュリティ > 回復



④ 図10 簡単リカバリーを実行するときは、「設定」画面の「更新とセキュリティ」を開き、「回復」を選ぶ。「このPCを初期状態に戻す」の「開始する」をクリックする



④ 図11 開いた画面で「個人用ファイルを保持する」をクリックする。誤って「すべて削除する」を選んで初期化してしまうと、個人用ファイルがすべて消えてしまうので注意



④ 図12 続く画面で「ローカル再インストール」をクリックする。これでCDドライブ内にあるOS再構築のシステムファイルを使って初期化される。何らかの不具合で失敗した場合は、図10の操作からやり直して「クラウドからダウンロード」を選択して進める

ソコン内のウィンドウズを再構築するプログラムが実行される。図14下の「削除されるアプリの一覧」で削除されるアプリを確認しておこう。消えて困るアプリやドライバーがあるなら、いったんキャンセルし、代替アプリを探すなど対策を講じたほうがよい。

「リセット」を押すと初期化が始まる。作業時間はパソコンの性能やデータ量などによって変わるが、早ければ30分かかる。44ページ図2の画面が表示されれば初期化は完了だ。

なお、パソコンが起動するうちに「回復ドライブ」を作っておこう。パソコンが起動しなくなっても回復ドライブから回復環境を呼び出せる(図15)。

第2部 不調時でも諦めない! リカバリーで完全復活!

設定はクラウドに保存! 簡単リカバリーの秘訣

# ここが肝心！アプリや設定を元通りに復元

簡単リカバリーでOSを初期化したら後処理をしよう(図1)。まずウェブブラウザのEdge(エッジ)などの標準アプリを最新の状態に戻す。初期化の直後のユーザーアカウントの画面で、PINコードを入力してMSアカウントでサインインする(図2)。これでクラウドから、データがダウンロードされて最新の状態になる。元に戻るまで多少のタイムラグが生じることもあるが、数分程度で完了する。

**OSのアップデートは必須 最新の状態になるまで繰り返し**  
続いてセキュリティ対策だ。削除さ

れたウィンドウズの更新プログラムは、決まったスケジュールで自動的にインストールされるが、タイミングがわからないので手動で実行したい。「設定」画面の「Windows Update」を開いて「詳細オプション」を開く(図3)。ここで「Windowsの更新時に…」をオンにすると、ウィンドウズ以外のマイクロソフト製品の更新も含まれる(図4)。前の画面に戻って「更新プログラムのチェック」を押せば、自動的に更新プログラムがインストールされる。更新ファイルは数回に分けて配信されるので「最新の状態です」と表示されるまで更新を繰り返そう(図5)。

セキュリティ対策アプリにも目を向けたい。他のアプリと同様に、セキュリティ対策アプリも削除されて再インストールする必要がある。だが焦る必要はない。何もなくてもOS標準の対策機能の「Windowsセキュリティ」が動作し続けて、ウイルスなどの侵入を監視しているからだ。すぐに対策アプリを再インストールしないからといって、たちまちウイルスに感染してしまうリスクは小さい。

## 有料のセキュリティ対策はリアルコードが必要

セキュリティ対策アプリを再インストール

ツールする際は、それまで有料と無料のどちらのタイプを使っていたかで作業内容が異なる。有料の場合は購入時に付属していたリアルコードを再インストール時に入力することで、契約した残り期限まで使えるようになる(図6)。リアルコードを紛失すると再インストールできなくなるので要注意。一方で無料の対策アプリは、基本的にセキュリティ対策機能のみ使うならリアルコードなどを必要とせず、インストールするだけで動作する。なお、初期化前からWindowsセキュリティでセキュリティ対策をしていた場合は、すでに動作しているので切り替えは不要だ。

## セキュリティ対策が肝心

簡単リカバリーの流れ

ここから始める

- 1 MSアカウントでサインイン
- 2 Chromeもアカウントでログイン
- 3 簡単リカバリーを実行する

リカバリー後の復元の流れ

ここでの操作

- 4 MSアカウントでサインイン
- 5 OSのアップデートとセキュリティ対策
- 6 ドライバーとアプリを再インストール
- 7 Chromeにログイン
- 8 OneDriveは別途操作が必要

図1 前パートでは簡単リカバリーでOSを初期化した。ここからはリカバリー前の使い勝手に戻すために必要な後処理を見ていきたい。MSアカウントでサインイン後はセキュリティ対策をして、消えたドライバーやアプリを再インストールするという流れだ

## MSアカウントでサインイン



42ページ図6で設定したPINコードを入力してサインイン

図2 OSの初期化が完了したら、42ページ図6の操作で設定した画面でPINコードを入力してサインインする(この画面が省略される場合もある)。サインイン後はクラウド上のデータが自動的にダウンロードされ、Edgeの「お気に入り」などが最新の状態に戻る

有料アプリの「ウイルスバスタークラウド」を例に再インストール方法を見ていこう。提供元のサイトで最新版のインストーラー(実行ファイル)をダウンロードする(図7)。それをダブルクリックして開いたインストール画面でリアルコードを入力すれば有効期限が復活する。対策アプリの切り替えを確認するには、「ウイルスと脅威の防止」画面を開く。そこに対策アプリの名前が表示されればよい(図8)。

ドライバーソフトを再インストールするときは、ウィンドウズアップデートのオプション機能を活用しよう。マイクロソフト以外の製品の場合でも最

## セキュリティ対策アプリを再インストール

### 有料のセキュリティ対策アプリ

- ・ウイルスバスタークラウド
- ・ノートン360デラックス
- ・カスペルスキーセキュリティ
- ・ESETインターネットセキュリティ
- ・マカフィーリブセーフ など

アプリの再インストール時に**シリアルコード**を入力することで、契約した**有効期限**まで使える

### 無料のセキュリティ対策アプリ

- ・アバスト無料アンチウイルス
- ・AVG AntiVirus FREE
- ・Avira Free Antivirus
- ・KINGSOFT Internet Security など

アプリを再インストールする(シリアルコードなどを入力する必要はない)

### OS標準のセキュリティ対策

- ・Windowsセキュリティ

簡単リカバリー後の追加操作は不要

図6 セキュリティ対策アプリを再インストールする。有料アプリの場合はシリアルコードを入力して残りの有効期限を復活させる。無料アプリの場合は再インストールすればよい。OS標準のセキュリティ対策機能を継続して使うなら追加の操作は不要だ

### ウイルスバスタークラウドの場合

ウイルスバスタークラウドをご利用中のお客さまへ

最初に「バージョンアップが必要を確認する方法」をご確認ください。

- ・すでに最新バージョンをお使いの場合は、そのままご利用ください。
- ・最新バージョンでない場合は、以下のボタンより**無料バージョンアップ**を

**無料バージョンアップ・インストール**

※ボタンをクリックした後は、本ページ下部の「無料バージョンアップ」へお進みください。

ウイルスバスタークラウド

シリアル番号の入力

シリアル番号を半角英数字で入力してください。シリアル番号をお持ちでない場合は、シリアル番号を登録してください。

FRH4 SRHK SSGJ 6UST 5SHJ

シリアル番号を入力

図7 有料アプリの「ウイルスバスタークラウド」の場合は、専用サイトでアプリのインストーラーをダウンロードする(1)。それを実行して表示された画面上でシリアルコードを入力すれば、有効期限が復活する(2)

### 設定 ▶ 更新とセキュリティ ▶ Windowsセキュリティ ▶ ウィルスと脅威の防止

Windows セキュリティ

ウイルスと脅威の防止

脅威からデバイスを保護します。

ウイルスバスタークラウド

ウイルスバスタークラウドは有効になっています。

現在の脅威

- 処置は不要

保護の設定

- 処置は不要です。

保護の更新

- 処置は不要です。

アプリを開く

図8 インストール後は「Windowsセキュリティ」の「ウイルスと脅威の防止」画面を開き、インストールした有料アプリが表示されればよい。無料の対策アプリの場合も同様だ

## OSのアップデートは急務

### 設定 ▶ 更新とセキュリティ

設定

Windows Update

利用できる更新プログラムはありません  
今後も最新の更新プログラムを毎日チェックします。

更新プログラムのチェック

更新を7日間一時停止  
[詳細オプション]に移動して、一時停止期間を変更します

アクティブ時間の変更  
現在は8:00から17:00まで

更新の履歴を表示する  
デバイスにインストールされている更新プログラムを表示する

詳細オプション  
追加の更新コントロールと設定

図3 OSを最新の状態にアップデート(更新)するには、「設定」画面の「Windows Update」を開き、「詳細オプション」を選ぶ(1)(2)

設定

詳細オプション

更新プログラムのオプション

Windowsの更新時に他のMicrosoft製品の更新プログラムを受け取る

オン

Windowsの更新時に他のMicrosoft製品の更新プログラムを受け取る  
従量制課金接続を使って更新プログラムをダウンロードする(追加料金がかかります)

図4 開いた画面で「Windowsの更新時に他のMicrosoft製品の更新プログラムを受け取る」をオンにし(1)、「←」をクリックする(2)。図3の画面に戻ったら「更新プログラムのチェック」をクリックする

利用可能な更新プログラム

最終チェック日時: 今日, 18:03

更新プログラムがインストールされる

悪意のあるソフトウェアの削除ツール x64 - 2019年7月 (KB890830)  
状態: ダウンロード待ち

2019-07 Cumulative Update for .NET Framework 3.5, 4.8 for Windows 10 Version 1903 for x64 (KB4506991)  
状態: ダウンロード待ち

最新の状態です

最終チェック日時: 今日, 12:29

更新プログラムのチェック

更新を7日間一時停止  
[詳細オプション]に移動して、一時停止期間を変更します

図5 更新が始まるのでしばらく待ち(1)、指示があったらパソコンを再起動する。その後も図3の「更新プログラムのチェック」を押して更新を実行し、「最新の状態です」と表示されるまで繰り返す(2)

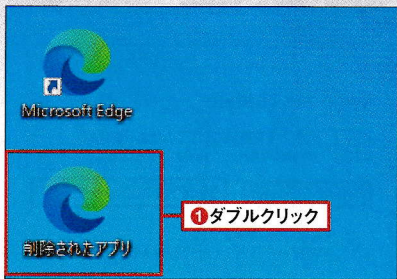
新版的ドライバーソフトをまとめてインストールできるので便利だ。図3の画面から「オプションの更新プログラム」画面を開いて「ドライバー更新プログラム」を選ぶ(次ページ図9、図10)。そこに表示されたドライバーソフトをすべてチェックし、「ダウンロードしてインストール」を押せばよい。プリンター複合機など一部のドライバーソフトは、ウィンドウズアップデート経由では入手できないことがある。その場合は手動でインストールする。通常はメーカーのサポートページでユーザー向けに無料配布しており、そこから実行ファイルをダウンロードする(図11)。

第2部 不調時でも諦めない!

リカバリーで完全復活! ここが肝心! アプリや設定を元通りに復元



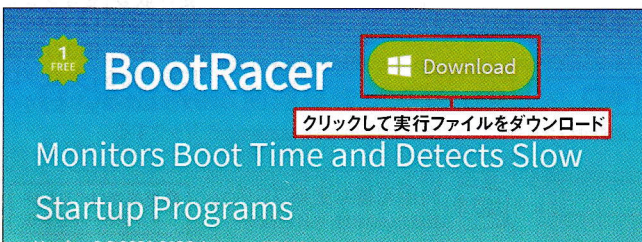
## デスクトップアプリを再インストール



③ 図12 初期化後にデスクトップアプリを再インストールするには、デスクトップ画面上の「削除されたアプリ」をダブルクリックする(1)。開いた画面でリンクになっている(URLが張られている)アプリ名をクリックする(2)

PC を初期状態に戻す処理中に削除されたアプリ

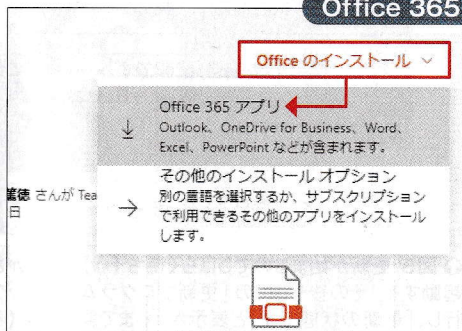
アプリ名	発行元	バージョン
7-Zip 19.00 (x64)	Igor Pavlov	19.00
AOMEI Backupper	AOMEI International Network Limited.	
Apple Mobile Device Support	Apple Inc.	14.1.0.35
Apple Software Update	Apple Inc.	2.6.3.1
Bonjour	Apple Inc.	3.1.0.1
BootRacer 8.0	Greatis Software	8.0
Brother iPrint&Scan	Brother Industries, Ltd.	9.0.0.123
CCleaner	Piriform	5.79



④ 図13 開いた画面でダウンロードボタンをクリックし、インストール用の実行ファイルをダウンロードする。それをダブルクリックして再インストールすればよい

## ●リンクになっていないアプリは手動で

⑤ 図14 図12の画面でアプリ名がリンクになっていない場合は、自力で提供元のサイトを開いてインストール用の実行ファイルをダウンロードする。右画面はOffice 365の再インストールの例だ



## ドライバーを再インストール

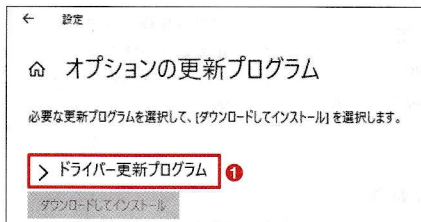
### Windows Update

利用可能な更新プログラム  
最終チェック日時: 昨日, 16:06

x64ベースのシステム (KB4577586) の Windows 10 Version 20H2 用 Adobe Flash Player の削除に関する更新  
状態: ダウンロード中 - 0%

オプションの更新プログラムを表示

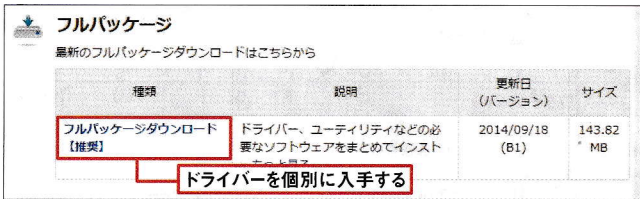
⑥ 図9 ウィンドウズアップデート経由でドライバーを再インストールするには、図3の画面で「オプションの更新プログラムを表示」をクリックする[注]



⑦ 図10 続く画面で「ドライバー-更新プログラム」をクリックして展開する(1)。すぐ下のリストに表示されたドライバーをすべてチェックし(2)、「ダウンロードしてインストール」をクリックする(3)



## ●一部は手動で再インストールする



⑧ 図11 ウィンドウズアップデートで入手できないドライバーは、メーカーのサポートページを開き、実行ファイルをダウンロードしてインストールする

アプリを再インストール! デスクトップ、Windowsのどっち?

続いて、削除されたアプリを再インストールする。アプリには従来のデスクトップアプリとWindows 8以降の新形式であるUWP(ユニバーサルWindowsプラットフォーム)アプリの2つがあり、それぞれ再インストールの方法が異なる。前者は公式サイトやベクターなどで配布されており、後者は原則「Microsoft Store(マイクロソフトストア)」からしか入手できない。

デスクトップアプリの場合は、デスクトップ画面上にある「削除されたアプリ」というファイルを利用すると手取り早い。これをダブルクリックして開くと初期化によって削除されたアプリが一覧表示される(図12)。その中でリンクが張られたアプリ名をクリックするとダウンロードページが開くので、簡単に再インストールできる(図13)。リンクを張っていない場合は、URLを入力するかGoogle検索などで提供元のサイトを開く(図14)。

なお、マイクロソフトオフィスもデスクトップアプリの1つだ。ダウンロードページを開くためには、マイクロソフトのサイトでMSアカウントを入力してサインインする必要がある。MSアカウントはオフィスにひも付けられたもので、OSのサインインと違うことがあるので注意したい。

[注] インストール可能なドライバーソフトがない場合は、「オプションの更新プログラムを表示」のリンクが表示されない

## 同期を有効にしますか？

すべてのデバイスでブックマーク、パスワード、履歴、その他の設定を同期する  
検索、広告、その他の Google サービスをカスタマイズするために、Google で履歴が使用されることがあります

同期する項目はいつでも [設定] で選択できます。



図18 「同期を有効にしますか?」と表示されたら「有効にする」を押す。しばらくすると設定やブックマークなどがクラウドからダウンロードされ、元の状態に戻る

## OneDriveは手動でサインイン

図19 OneDrive (ワンドライブ) にサインインするには、通知領域のアイコンをクリックして「サインイン」を押す(1、2)

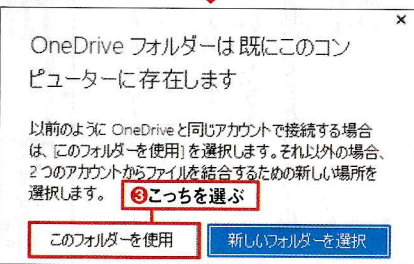
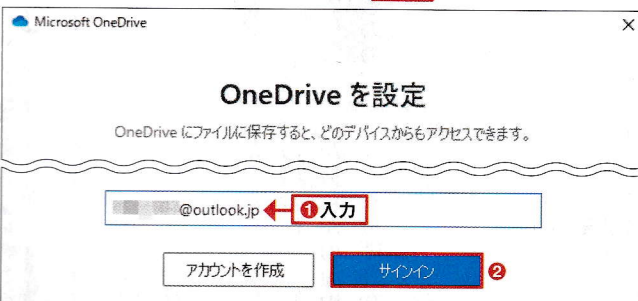
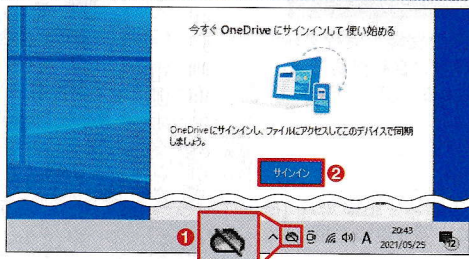


図20 開いた画面でMSアカウントを入力して「サインイン」を押す(1、2)。続く画面では「このフォルダーを使用」を選ぶ(3)。これで既存の「OneDrive」フォルダーが同期対象として設定される

クラウドストレージの OneDrive (ワンドライブ) も、初期化後に同期が無効化されることがある。通知領域にある雲のアイコンに斜線が入っていたら同期できていない。使えるようにするには手動でサインインして同期する(図19)。すると、同期の対象フォルダーを指定する画面が表示されるので、「このフォルダーを使用」を選ぶ(図20)。これで既存の「OneDrive」フォルダーが同期対象になる。

## UWPアプリは履歴で復元

図15 UWPアプリを再インストールするときは「Microsoft Store」を起動する。開いた画面の右上の「…」をクリックし(1)、「マイライブラリ」をクリックする(2)

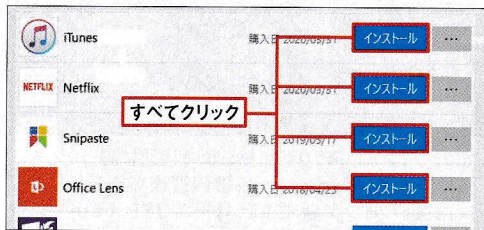
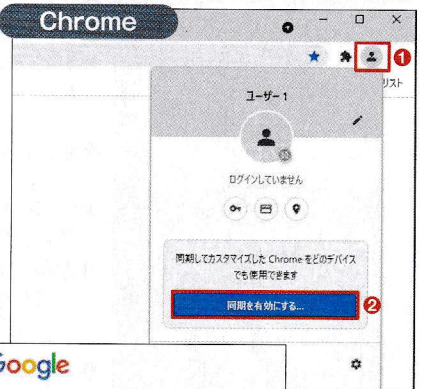


図16 右側のアプリ名の「インストール」をそれぞれクリックするとアプリがインストールされる

## Chromeの設定を復元する

図17 Chrome (クローム) の設定を復元するには、起動して画面右上の人の形のボタンをクリックし(1)、「同期を有効にする」を押す(2)。開いた画面で指示に従ってメールアドレスやパスワードを入力してGoogleアカウントでログインする(3)



UWPアプリは、Microsoft Store から一括インストールできる。デスクトップアプリと比べると簡単だ。これは、MSアカウントに過去にインストールしたアプリの履歴が記録されているからだ。ストアの「マイライブラリ」画面を開くと、過去にインストールしたUWPアプリが一覧表示される(図15、図16)。各アプリの右側にある「インストール」ボタンを連続して押せば、複数のアプリをまとめてインストールできる。

Gアカウントでのログインでブックマークが復活

Chrome (クローム) のブックマークや設定を復元するには、アプリの再インストール後にもうひと手間必要だ。Google アカウントを入力してログインして同期を実行する(図17、図18)。これでクラウド上のデータがダウンロードされて、ブックマークや設定などが元の状態に戻る。

# 起動しないパソコンを回復環境で復旧する

ある日突然「パソコンが全く起動しない」という事態に陥ったら、一度冷静になって現在のパソコンの状態を把握しよう。例えば、電源ボタンを押しても無反応で画面や各種LEDも点灯せず、ファンの回転や動作音もしない状況であれば、パソコンが壊れている可能性

が高い。いわばハード的な障害だ。電源ケーブルやバッテリーの残量などを確認し、それでも無反応であればメーカーにパソコンの修理を依頼する。これに対して、ソフト的な障害もある。例えば、電源ボタンを入れて、パソコンの起動画面は表示されたものの、

ウィンドウズ10の起動画面が表示されない、あるいは表示されてもその後のサインイン画面やデスクトップ画面にたどり着かないといったケースだ。その場合は、10の起動に必要なファイルが何らかの原因で壊れ、起動できなくなった可能性が高い。

そのような症状の場合、10の回復環境の「詳細オプション」から復旧を試す手がある(図1)。本来、これらの修復機能は正常動作時には試さないのが無難だ。あくまで起動できないときの非常手段と考えたい。  
回復環境の詳細オプションは図2の

## 回復環境の詳細オプションでトラブルを解決

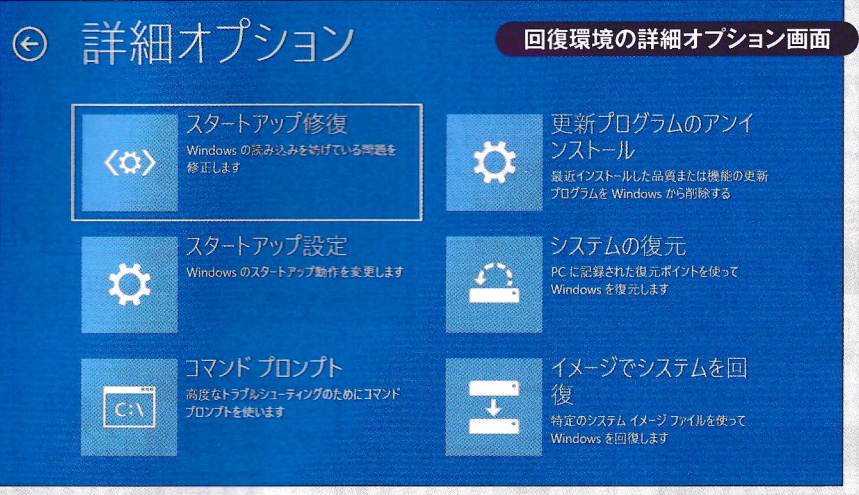


図1 回復環境は、ウィンドウズ10が起動しない状態に陥ったときに、各種修復機能を実行するための機能だ。その「詳細オプション」から各種修復機能を実行できる。回復環境は自動修復で直らなかった場合や、回復ドライブや新規インストールUSBメモリーからも起動できる

### ●回復環境でできること

スタートアップ修復	<ul style="list-style-type: none"> <li>●起動に必要なシステムファイルやレジストリのチェック</li> <li>●破損した上記ファイルの修復</li> <li>●ディスクのエラーチェックなど</li> </ul>
コマンドプロンプト	<ul style="list-style-type: none"> <li>●起動に必要なシステムファイルの手動修復</li> </ul>
更新プログラムのアンインストール	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ウィンドウズアップデートで自動適用した更新プログラムを削除</li> <li>●大型アップデートの削除 (※アップデート後、10日以内に実行する必要あり)</li> </ul>
UEFIファームウェアの設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>●パソコンのBIOS画面やUEFI画面の表示</li> </ul>
システムの復元	<ul style="list-style-type: none"> <li>●正常動作時に自動または手動で作成した復元ポイントを使い、10やアプリ、ドライバーソフトの状態を正常時に書き戻す (復元ポイント作成後にインストールしたアプリやドライバーソフトなどは消去される)</li> </ul>
このPCを初期状態に戻す	<ul style="list-style-type: none"> <li>●パソコンの状態を工場出荷時に戻すリカバリー(自動起動、または回復ドライブから回復環境を起動したときのみ実行可能)</li> </ul>
イメージでシステムを回復	<ul style="list-style-type: none"> <li>●コントロールパネルの「バックアップと復元(Windows 7)」で作成した、システムイメージをパソコンに書き戻す</li> <li>●事前にイメージファイルの作成が必要 (システムイメージ作成後にインストールしたアプリやドライバーソフト、個人用ファイルなどは消去される) ※マイクロソフトはバージョン 1709 以降での使用を非推奨としており、今回の特集では説明を省く</li> </ul>

図2 回復環境では上記の各種修復機能を実行できる。起動しないときは「スタートアップ修復」や「コマンドプロンプト」「更新プログラムのアンインストール」を実行し状況が変わるか試す。それでも起動しない場合は、「システムの復元」や「このPCを初期状態に戻す」で正常時に戻す

## USBメモリーから起動して回復環境を開く

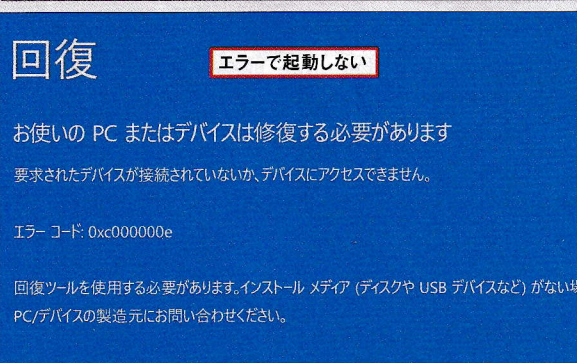
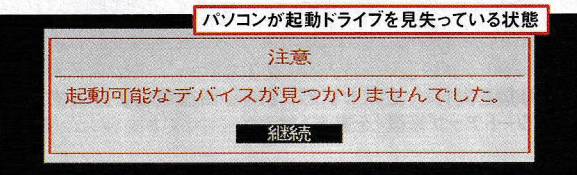


図6 エラーや注意が表示されて起動できない場合、回復ドライブ(詳しくは43ページ図15)を使い起動する



## 新規インストール用USBメモリーでは修復を選ぶ



図7 新規インストール用のUSBメモリー(詳しくは54ページ)でも、回復環境を起動できる。回復環境を開くには2番目の画面で「コンピューターを修復する」を選ぶ

## 10プロはBitLockerの回復キーを用意

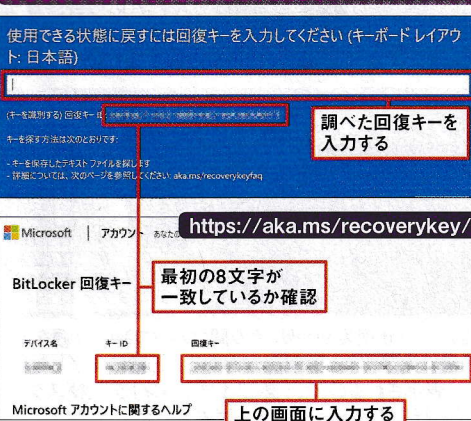


図8 10プロでシステムドライブがBitLockerによって暗号化されている場合、回復環境の一部作業を実行すると回復キーを求められる。別のパソコンやスマホなどでマイクロソフトのページを開き、該当する回復キーをメモしておき入力する

## 2回起動に失敗すると自動修復を実行

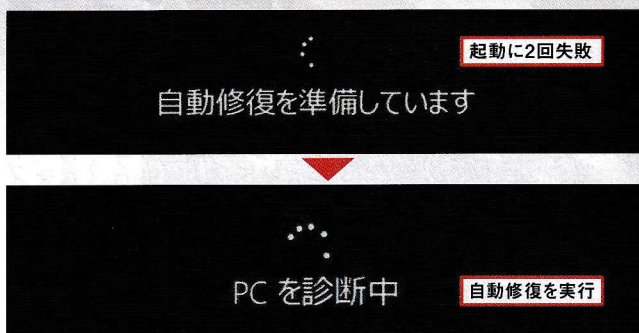


図3 10は2回起動に失敗すると、3回目の起動時に自動修復を実行する。自動修復はシステムファイルのチェックや修復などで復旧を試みる

## 回復環境を起動して10を手動で修復

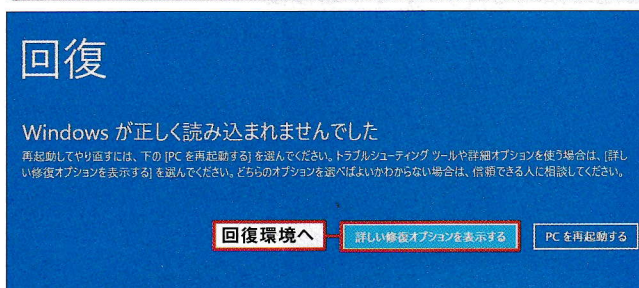


図4 自動修復を実行しても10を起動できない場合、画面のようなエラー画面を表示する。ここで「詳しい修復オプションを表示する」を選ぶと、回復環境が起動する

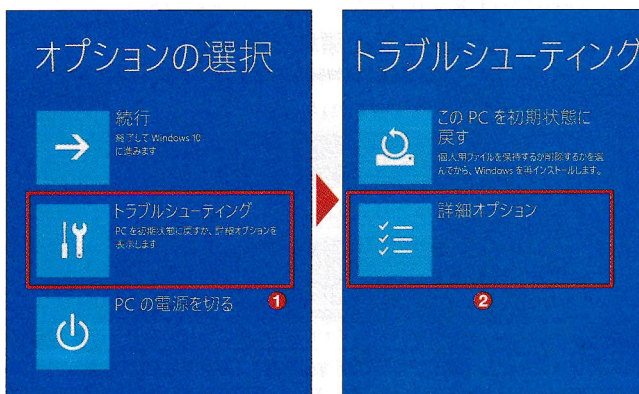


図5 回復環境が開いたら「トラブルシューティング」(1)の、「詳細オプション」を開く(2)。図1の画面が表示され、各種修復機能を実行できる

不調時でも諦めない! リカバリーで完全復活!

起動しないパソコンを回復環境で復旧する

10は2回連続で起動に失敗すると、3回目の起動時に自動修復機能が働き、簡易的なチェックと修復を試みる(図3)。それでも修復できない場合は、エラー画面が表示される。この画面から回復環境を起動できる(図4)。回復環境の「トラブルシューティング」にある「詳細オプション」を開くと、各種修復機能を利用できる(図5)。

もし、図4のようなエラー画面が表示されない場合、事前に作成した回復ドライブから起動する(図6)。図5右の画面が表示されるので、同様に詳細オプションを開く。もし、事前に回復ドライブを作成していなければ、別のパソコンで新規インストール用のUSB

表のような各種修復機能を持つ。最初は「スタートアップ修復」を試し、「コマンドプロンプト」の修復機能を試す。それで直らなければ「更新プログラムのアンインストール」や「システムの復元」などを試す。これらの機能では、個人用ファイルは残るものの、一部のアプリが消えることもある。

回復環境の詳細オプションの修復機能をひと通り試しても修復できなければ、リカバリーや新規インストール、バックアップイメージからの復元などOSの入れ替えを検討する。ただし、これらはアプリはもちろん、個人用ファイルも状況によっては削除される。

**2回起動失敗で自動修復**  
**それでもダメなら回復環境で修復**

## コマンドプロンプトで手動修復

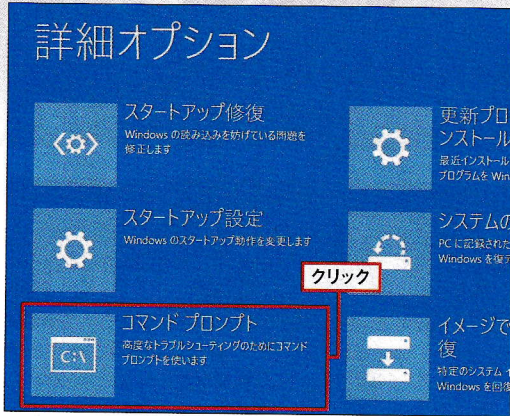


図12 コマンドプロンプトは各種修復コマンドを実行できる。ここではコマンドを使った起動領域の手動修復と、起動領域の再構築の方法を紹介しよう。回復環境の詳細オプションから「コマンドプロンプト」を選ぶ

### ●起動領域をコマンドで手動修復

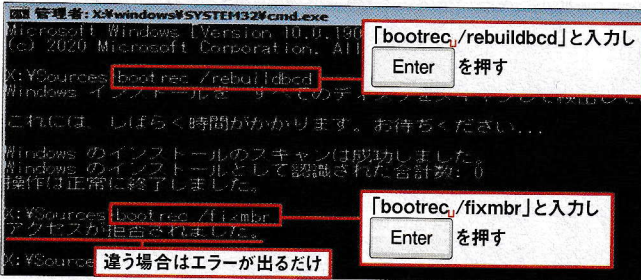


図13 UEFIのパソコンとBIOSのパソコンで実行するコマンドが異なる。UEFIのパソコンであれば「bootrec /rebuildbcd」を、BIOSのパソコンであれば「bootrec /fixmbr」を実行する（uは半角スペース）。異なる場合はエラーが表示されるため、どちらかを入力して試す

### ●UEFIのパソコンで起動領域を再構築

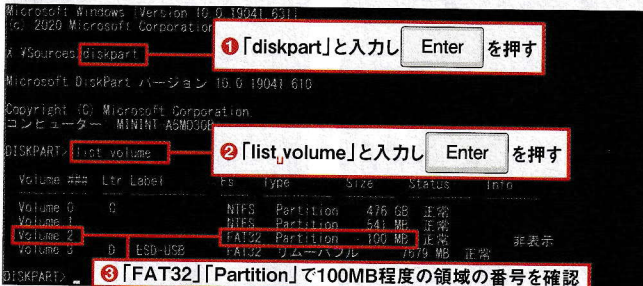


図14 「diskpart」コマンドを実行する(1)。「list volume」を実行すると、現在のパーティションが全て表示される(2)。その中で「Fs」が「FAT32」、「Type」が「Partition」、「Size」が100MB程度の領域が起動領域となる。その番号を確認しておく(3)

「詳細オプション」に並ぶメニューで最初に試したいのが「スタートアップ修復」だ(図9)。修復するOSを選ぶと、修復作業が始まる(図10)。スタートアップ修復で問題が解決すれば、自動的に再起動が正常に動作する。解決しなければ図11のようなエラー画面が出る。この画面から回復環境に戻るの、再度試みよう。2、3回繰り返すと解決する場合もある。

それでも直らなければ、コマンドプロンプトの修復コマンドで起動領域の回復を試みる(図12)。コマンドのオプションは2つあり、パソコンによって異なるが、間違っても入力してもエラーではじかれるだけなのでどちらかを入力して試す(図13)。

UEFI対応のパソコンの場合、

## スタートアップ修復で問題を自動解決

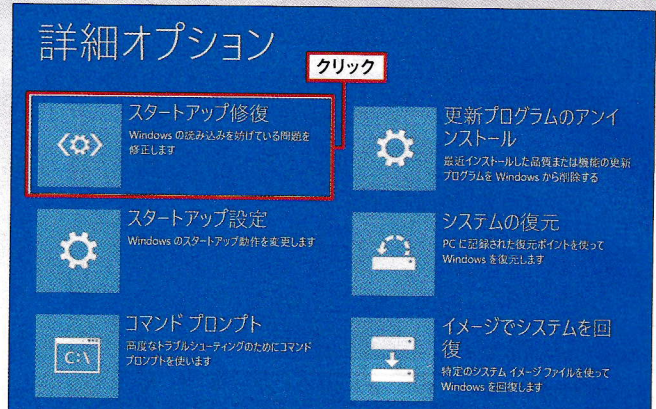


図9 スタートアップ修復はシステムに必要なファイルやシステムドライブの確認と修復を実行し、正常な状態に戻す。回復環境の詳細オプションを開き「スタートアップ修復」を選ぶ

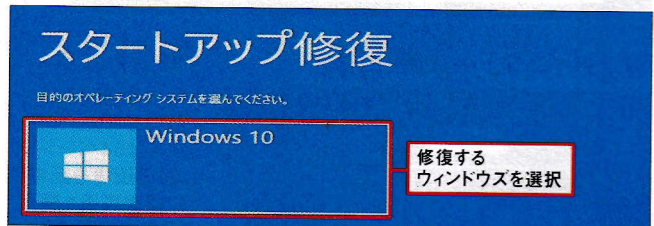


図10 選択画面が表示されたら「Windows 10」を選ぶ。回復環境の起動方法によっては10のユーザーアカウントでのサインインが必要となるので、ユーザーを選びパスワードを入力してサインインする

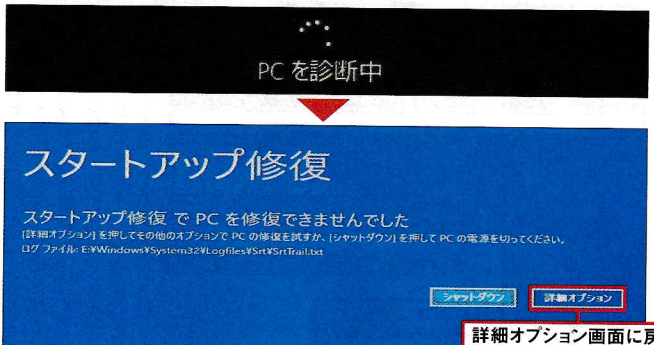


図11 作業時間は2~10分程度かかり、その間はパソコンの電源を落とさず待つ。修復が正常に完了すると再起動がかかる。正常に完了しなかった場合は下の画面が表示されるので、「詳細オプション」を選びスタートアップ修復を2~3回実行して状況が変わるか試す

メモリーを作成し、それから回復環境を起動する(図7)。

10プロを搭載するパソコンの場合、BitLockerと呼ぶ機能でCDドライブを暗号化していることがある。その場合、修復機能を実行する前にCDドライブの暗号化の解除を問われるので、解除できる回復キーを事前に調べておく。BitLockerの回復キーは、10をMicrosoftアカウントで利用していればクラウドに保存されているので、別のパソコンやスマホでそれを参照する(前ページ図8)。

**スタートアップ修復は数回実行  
手動で起動領域の再構築も**

[注] Unified Extensible Firmware Interfaceの略。BIOSに代わるマザーボードの新しいファームウェア・インタフェース。BIOSよりも大容量のディスクを管理できる。最近、ほとんどのパソコンがUEFI対応だ

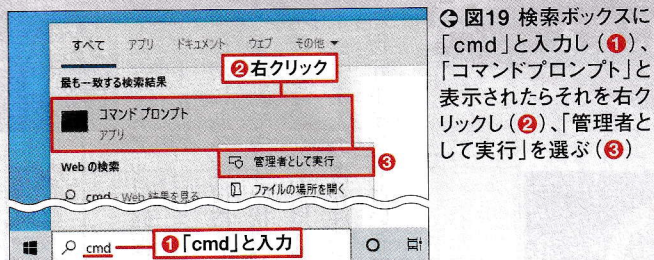


図19 検索ボックスに「cmd」と入力し(1)、「コマンドプロンプト」と表示されたらそれを右クリックし(2)、「管理者として実行」を選ぶ(3)

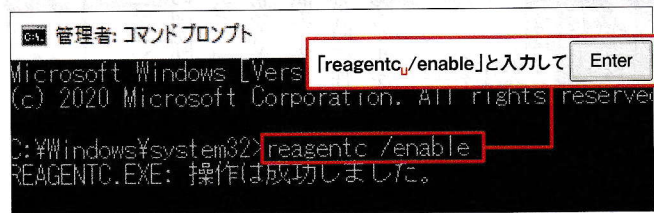


図20 「reagentc /enable」コマンドを実行すると作業は完了。回復環境を開くと、詳細オプションが追加される

### 自動適用した更新プログラムを削除する

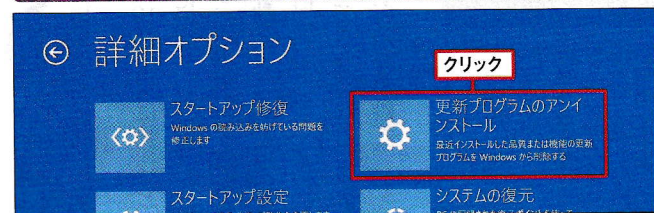


図21 ウィンドウズアップデート後に起動しない場合は、更新プログラムを削除して起動するかを試みる。回復環境の詳細オプションから「更新プログラムのアンインストール」を開く

### 更新プログラムのアンインストール

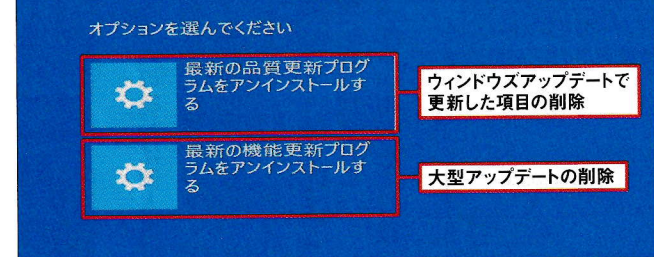


図22 「最新の品質更新プログラムをアンインストールする」を選ぶと、ウィンドウズアップデートで自動適用した更新プログラムを削除できる。「最新の機能更新プログラムを…」は大型アップデートを削除可能だ。ただし、大型アップデートは適用後から10日以内のみ実行できる

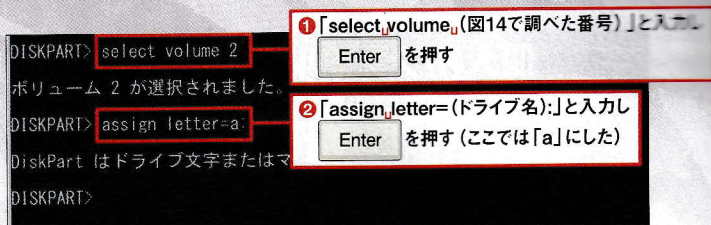


図15 「select volume (図14で調べた番号)」を実行し、起動領域を選択する(1)。「assign letter=(ドライブ名):」コマンドで、ドライブ名を割り当てる。ドライブ名はアルファベットなら何でもよい(2)

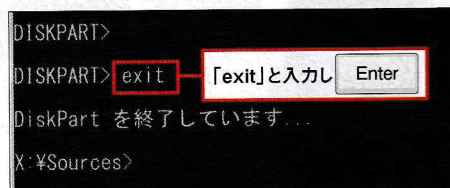


図16 初期化の事前準備はこれで終了。「exit」を実行し、diskpartを終了する

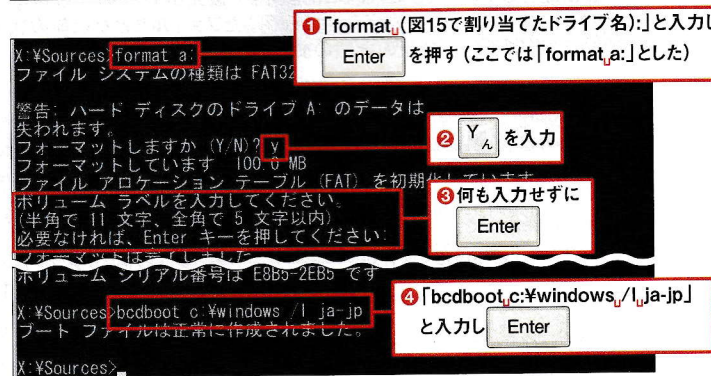


図17 「format」コマンドを実行し、図15でドライブ名を割り当てた起動領域を指定し初期化する(1~3)。フォーマットが完了したら「bcdboot」コマンドで起動領域を書き込む(4)

### 回復環境を再認識させる

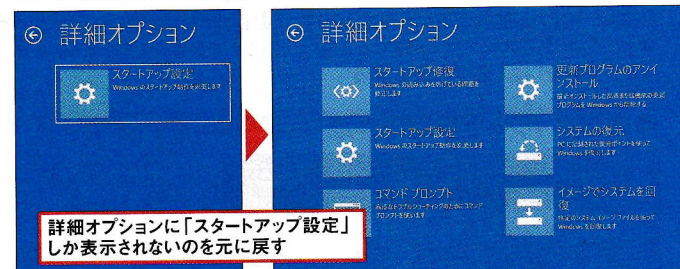


図18 起動領域を再構築すると、「詳細オプション」に「スタートアップ設定」しか表示されないことがある。それを復旧後にコマンドプロンプトから修復する

### 直近の更新プログラムの削除で状況が変わるか試す

新たに起動領域を設定できる。パーティションを操作する「diskpart」コマンドを実行し、現在の起動領域の位置を探す。図14の3条件(Fs = FAT32, Type = Partition, Size = 100MB程度)に適合するのが起動領域だ。その領域にドライブ名を割り当て(図15)、diskpartを終了(図16)。コマンドプロンプトに戻るので、ドライブ名を割り当てた起動領域をフォーマットし、起動ファイルを構築する「bcdboot」コマンドを実行する(図17)。

コマンドプロンプトで修復を試みた場合、修復後に回復環境が無効化されることもある(図18)。その場合、復旧後にコマンドプロンプトを管理者として起動し(図19)、回復環境を有効化するコマンドを実行する(図20)。

ウィンドウズアップデートで更新プログラムを適用した直後に起動しない状況に陥ったら、更新プログラムを削除して状況が変わるか確かめる。回復環境の詳細オプションでは、直近に適用した更新プログラムを削除できる(図21)。選択肢に「品質更新プログラム」と「機能更新プログラム」の2種類があるが、前者は日常的に提供される更新プログラム、後者は半年に1度適用される大型アップデートを指す。どちらかを選んで削除する(図22)。

第2部 不調時でも諦めない! リカバリーで完全復活! 起動しないパソコンを回復環境で復旧する

# 復元ポイントで10を正常動作時に書き戻す

スタートアップ修復やコマンドプロンプト、更新プログラムの削除など、回復環境にある修復機能をひと通り試しても起動できない状況が改善されなければ、システムの復元を試みよう。  
システムの復元は、正常時に作られる復元ポイントというファイルを使い、

Windows 10を正常に動作していた以前の状態に戻す。アプリをインストールしたり、周辺機器を接続してドライバーを自動インストールしたりした場合など、環境が大きく変わったときに10が起動できなくなることがある。そんな場合に有効な手段だ。

システムの復元は個人用ファイルをそのままの状態に残すので、バックアップを作成していないパソコンでも実行しやすい。ただし、アプリやドライバーは、復元ポイントを作成した時点の状態に書き戻される。  
システムの復元を実行後、どのアプリ

りやドライバーが10の起動を妨げているのか、原因を探りつつ再インストールしていく必要がある(図1)。  
10はシステムの復元の保護機能を初期設定で有効にしており、復元ポイントは特定の条件で自動作成される(図2)。正常時に不安を感じたら手動でも

## 個人用ファイルを残したまま正常時に戻す

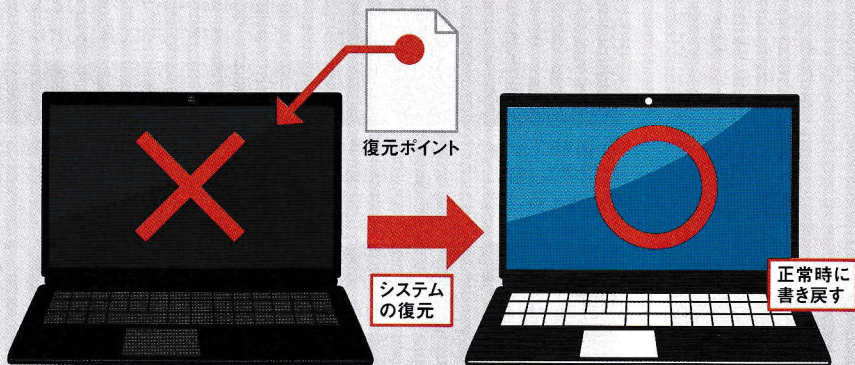


図1 システムの復元は正常時に自動や手動で作成した復元ポイントというファイルを使い、10が正常動作していたときの状態に書き戻す。復元ポイントの作成後にインストールしたアプリやドライバー、Windowsアップデートで適用したファイルなどが以前の状態に戻される。個人用ファイルには影響がなく、最新の状態のまま維持する

## 復元ポイントは特定のタイミングで勝手に作られる

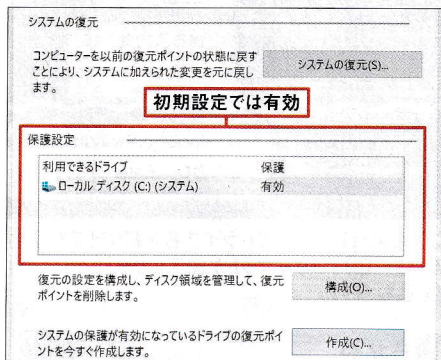


図2 10の初期設定ではシステムの復元の保護設定が有効で、アプリやドライバーのインストール時や、Windowsアップデート時などに復元ポイントを自動で作成する。また、1週間復元ポイントの作成がなかった場合にも、勝手に作成する

### 復元ポイントが作成される条件

- ▶ OSの新規インストール時
- ▶ 7日間復元ポイントの作成がなく、アイドル状態が10分続いたとき
- ▶ デジタル署名がないアプリやデバイスドライバーのインストール時
- ▶ Windowsアップデートによって更新プログラムをインストールしたとき
- ▶ システムの復元の実行直前
- ▶ 手動作成

## ● 復元ポイントを手動で作成

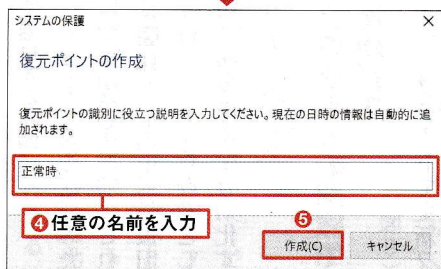
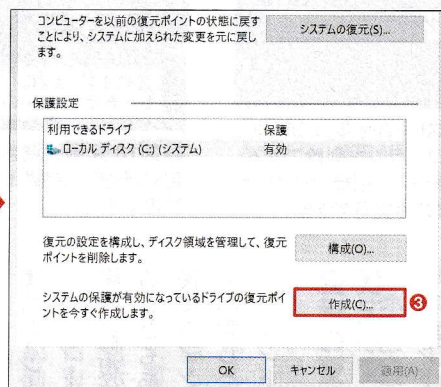
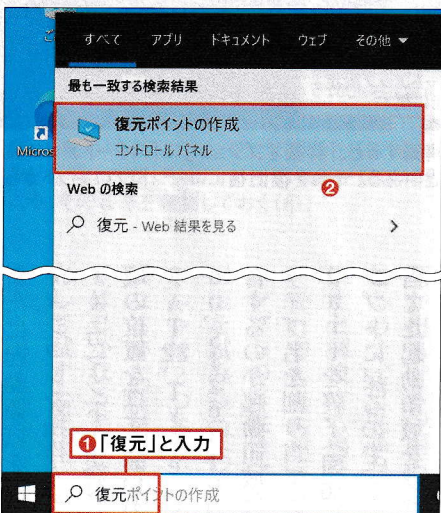


図3 タスクバーの検索ボックスに「復元」と入力すると(1)、「復元ポイントの作成」が表示されるので開く(2)。「システムのプロパティ」の「システムの保護」タブが開くので「作成」を選ぶ(3)。入力欄に任意の名前を入力し(4)、「作成」で作業を開始する(5)

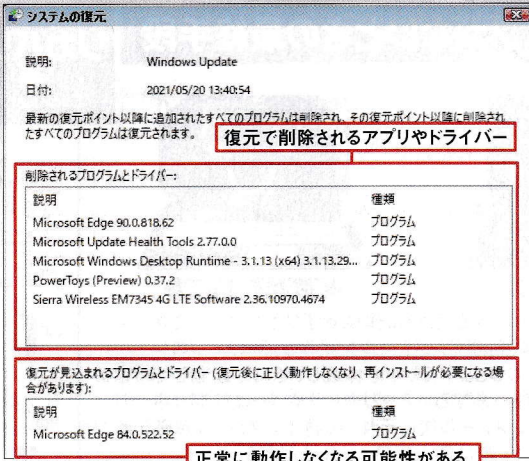


図8 システムの復元後に削除や影響を受けるアプリやドライバーを確認しておく。作業完了後、これらをウィンドウズアップデートや手動で再インストールする必要がある

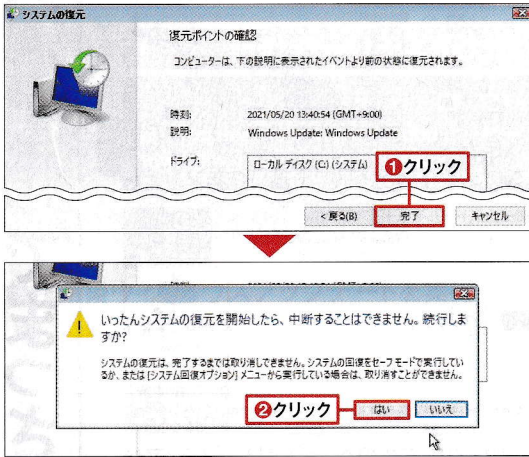


図9 作業内容の確認画面が表示されるので内容を確認し、「完了」を選ぶ(1)。警告が表示されたら「はい」を選ぶと作業を開始する(2)。作業完了後に再起動し、問題なければ10が起動する

## システムの復元で正常動作時に戻す

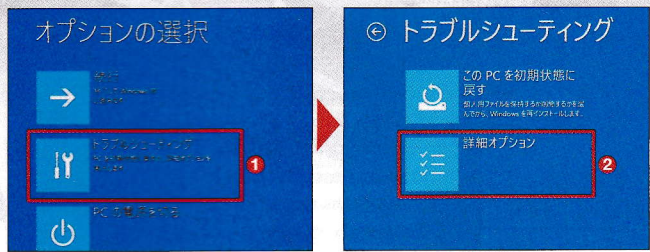


図4 自動修復のエラー画面、もしくはUSBメモリーを使い回復環境を起動し(詳しくは49ページ)、「トラブルシューティング」の「詳細オプション」にある「システムの復元」を開く(1~3)

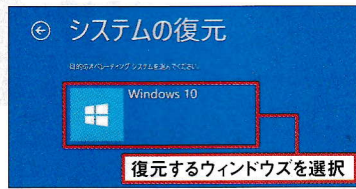
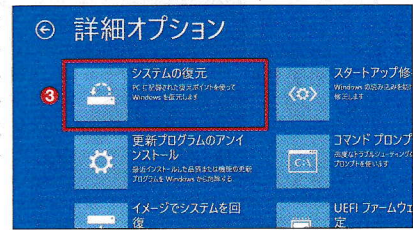


図5 システムの復元を実行する10を選ぶ。回復環境の起動方法によってはこの後に10のユーザーでのサインインが必要となるので、日ごろ10で使っているユーザーを選び、パスワードを入力してサインインする

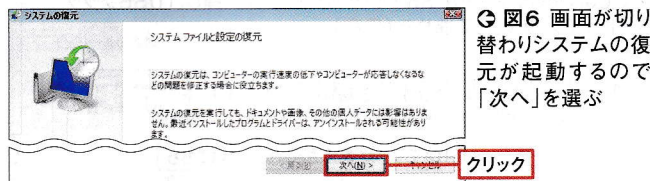


図6 画面が切り替わりシステムの復元が起動するので「次へ」を選ぶ

## 正常動作時にシステムの復元を使う

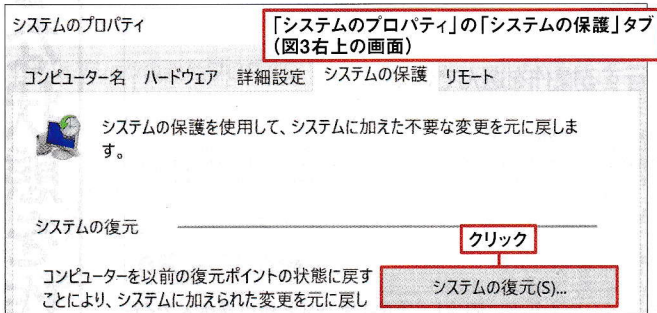


図10 正常時もシステムの復元を利用できる。図3の方法で「システムのプロパティ」を開き、「システムの復元」を選ぶと、図6のダイアログボックスが表示される。後の手順は図7~図9とほぼ同じ

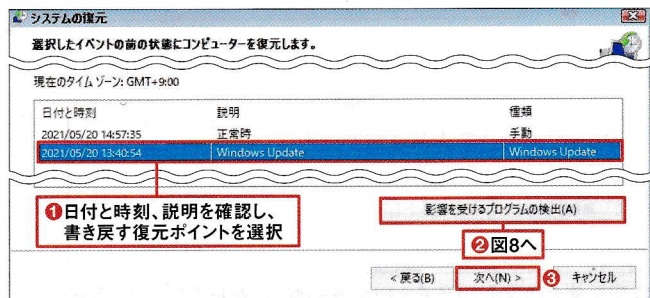


図7 復元ポイントの選択画面が表示されるので、日付と時刻や説明を確認し、書き戻す復元ポイントを選択する(1)。選択後「影響を受けるプログラムの検出」を開く(2、図8へ)。影響を受けるプログラムを確認したら「次へ」で進める(3)

復元ポイントの選択や、影響のあるアプリやドライバーの確認が済んだら、確認画面の内容に合意して実行する。パソコンにもよるが作業は数分で完了する。その後、自動的に再起動し、問題なければ10が正常に起動する(図9)。

10は起動するが、利用中に突然エラー画面が表示される、操作を受け付けずフリーズするといった問題が発生するときは、システムの復元で書き戻して復旧できる場合がある。10の起動後でも、設定からシステムの復元の回復作業を実行可能だ(図10)。

復元ポイントを作成できる。10の環境が大幅に変わる前に、予防策として復元ポイントを作成しておくことで問題が発生したときに修復が楽になる(図3)。

影響するアプリやドライバーを確認10の起動後でも実行可能

システムの復元の回復作業は、回復環境の詳細オプションから実行できる(図4)。復元したい10を選ぶと(図5)、システムの復元の作業画面に切り替わるので、画面の指示に従って進める(図6)。復元ポイントを選ぶ画面が表示されたら、日付や時刻、説明などを確認し、復元ポイントを選ぶ(図7)。「影響を受けるプログラムの検出」を開くと、システムの復元で影響を受けるアプリやドライバーを一覧表示する。これらをメモしておき、システムの復元を実行した後に再インストールすればよい(図8)。

第2部 不調時でも諦めない! リカバリーで完全復活!



回復ドライブがないときの最終手段



調子が悪い10 → まっさらな10を作成  
新規インストール

図1 回復ドライブを正常時に作成せずリカバリーができない状態であれば、新規インストールを試みる。別のパソコンでインストール用のUSBメモリーを作成し、それで起動して10を新たにインストールする。アプリやドライバは初期化されるので、新規インストール後にそれらの再インストールが必要。また、フォーマット時は個人用ファイルも消える

インストール用USBメモリーを作成

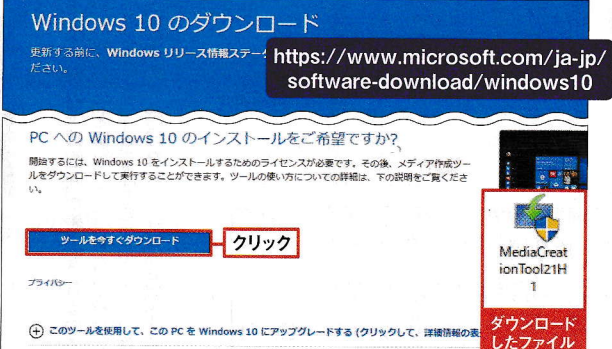


図2 別のパソコンでマイクロソフトのページを開き、「メディア作成ツール」というアプリを入手して実行する

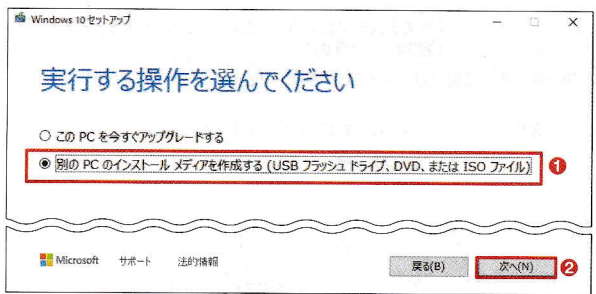


図3 ライセンス条項に同意し、次の「実行する操作を選んでください」の画面で「別のPCのインストールメディアを作成する」を選ぶ

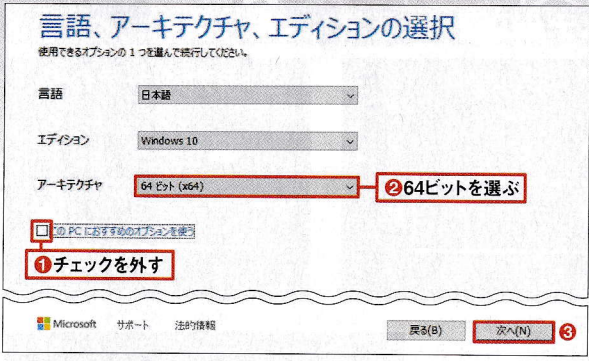


図4 上の画面で「このPCにおすすめのオプションを使う」のチェックを外す(1)。「アーキテクチャ」を「64ビット」にし(2)、「次へ」をクリックする(3)

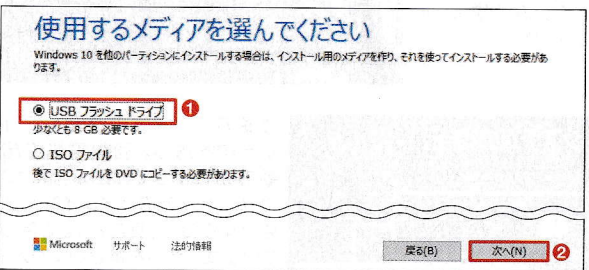


図5 「使用するメディアを選んでください」の画面でデータがなくてもよい8GB以上のUSBメモリーをパソコンに挿し、「USBフラッシュドライブ」を選んで進める(1)(2)

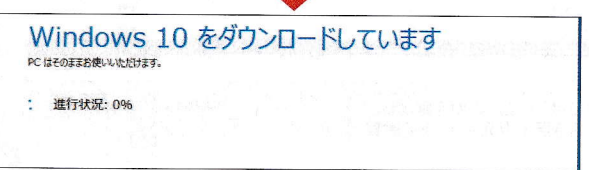
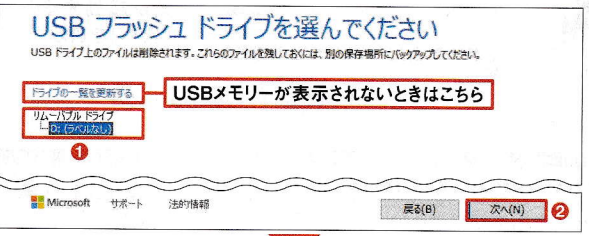


図6 書き込み先のUSBメモリーを一覧から選択する(1)。選択したUSBメモリーのデータはすべて消えるので注意。問題なければ「次へ」を選ぶ(2)。データのダウンロードが始まりUSBメモリーの作成作業を開始する

**起動用のUSBメモリーを作成  
アプリやドライバは自分で用意**

この作業には、新規インストール用のUSBメモリーの作成が必要だ。作業用の別のパソコンと、中身が消えてもよい容量8GB以上のUSBメモリーを用意する。

作業は、別のパソコンで作成アプリをダウンロードし実行する(図2)。作業途中の選択画面で「別のPCのインストールメディアを作成する」を選ぶのがポイントだ(図3)。また、CPUやOSのアーキテクチャの種類を選ぶ画面が表示されるが、現在のパソコン

回復環境の修復機能や、システムの復元を実行しても復旧できない場合、回復ドライブからのリカバリーを実行する。ただ、正常なときに回復ドライブを作成していなければ、リカバリーはできない。その場合は、新規インストールが最終手段になる。

新規インストールは、まっさらな状態の10をインストールする機能だ。アプリや周辺機器のドライバなども削除するため、新規インストール後に改めて自分で用意しなくてはならない。Cドライブのフォーマットを実行すると、個人用ファイルもすべて削除される。前の環境がすべて消えるので注意したい(図1)。

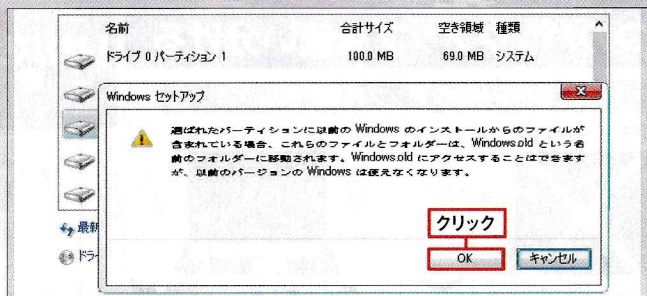


図10 図9の画面でフォーマットを実行しなかった場合、以前の10や個人用ファイルは「Windows.old」というフォルダーが作られてその中に残される。その警告画面が表示されるので「OK」を選ぶ。なお、このフォルダーは新規インストールから30日を過ぎると自動で削除されるので、データが必要ならそれまでに別の場所に退避させる

### ●10の初期設定画面を表示

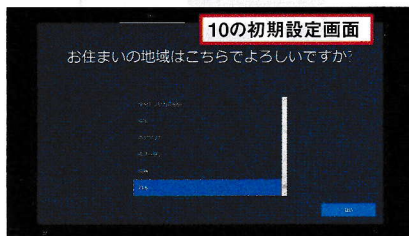


図11 インストールを開始するとファイルをコピーする。その作業が完了し再起動すると、10の初期設定画面が表示される

### ●作業後ウィンドウズアップデートを実行

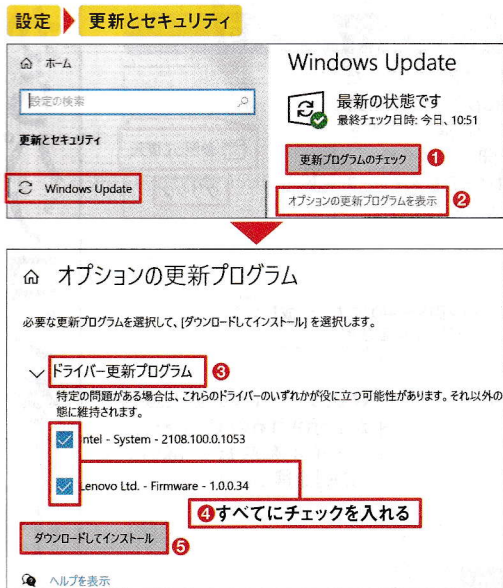


図12 インストール後、「設定」画面の「Windows Update」を開き、「更新プログラムのチェック」を実行する(1)。「更新後「オプションの更新プログラムを表示」を選び(2)、「ドライバー更新プログラム」を開き(3)、すべての項目をチェックし(4)、「ダウンロードしてインストール」を選ぶ(5)

インストールしたいなら、ここでフォーマットを実行する(図9)。実行しない場合には、新規インストール後に「Windows.old」というフォルダーの中に個人用ファイルが丸ごと残る。このフォルダーは30日経過すると自動で削除されるので、必要なら別の場所に移動しておこう(図10)。

インストールする領域を選んで進めるとファイルのコピーが始まり、途中で再起動する。その後、10の初期設定画面が表示されるので、リカバリーと同様に設定すればよい(図11)。新規インストール後はアプリやドライバーの再インストールが必要だ。ドライバーはウィンドウズアップデートで入手できる(図12)。

### 10を新規インストール

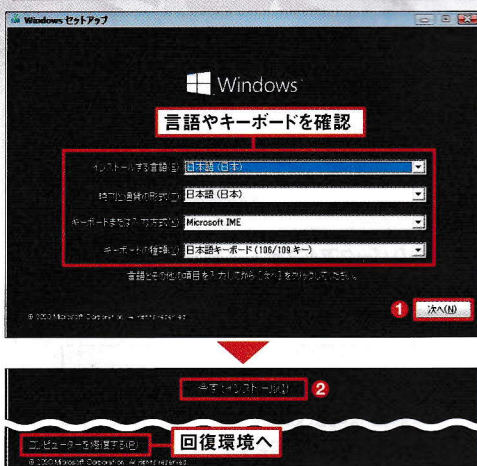


図7 図2〜6で作成したUSBメモリーをパソコンに挿し電源を投入すると、「Windowsセットアップ」が開くので言語やキーボードを確認し「次へ」を選ぶ(1)。次の画面は「今すぐインストール」を選択する(2)。なお、不調時に回復環境を開くにはここで「回復環境へ」を開く

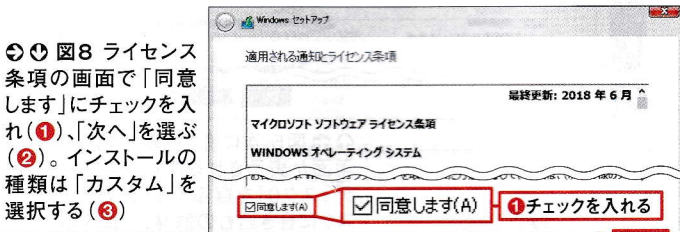


図8 ライセンス条項の画面で「同意します」にチェックを入れ(1)、「次へ」を選ぶ(2)。インストールの種類は「カスタム」を選択する(3)

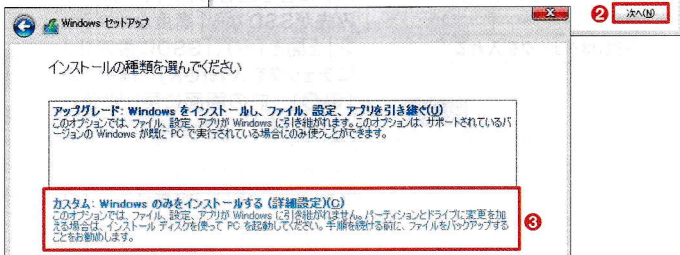
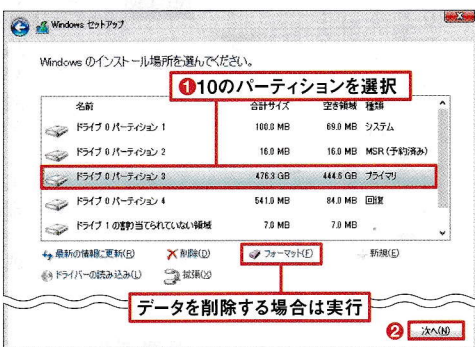


図9 10がインストールされているパーティションが自動選択される。異なる場合はドライブの名前や容量などを確認して10のパーティションを選ぶ(1)。データを削除する場合は、選択状態で「フォーマット」を実行する。インストールを開始するには、「次へ」を選ぶ(2)



のほとんどは64ビットなのでそれを選ぶ(図4)。使用するメディアは「USBフラッシュドライブ」を選び(図5)、書き込み先を指定する(図6)。

新規インストール用のUSBメモリーを作成したら、起動しないパソコンに挿して電源を入れる。言語やキーボードの種類などが日本語になっているか確認し、問題なければ「次へ」を押して先に進み、「今すぐインストール」を選ぶ(図7)。

インストール方法を尋ねる画面では「カスタム」を選択(図8)。インストールする場所を選ぶ画面では、10がインストールされている領域が自動で選択された状態になっている。

もし、データを消去してまっさらな状態にしたいなら、ここでフォーマットを実行する(図9)。実行しない場合には、新規インストール後に「Windows.old」というフォルダーの中に個人用ファイルが丸ごと残る。このフォルダーは30日経過すると自動で削除されるので、必要なら別の場所に移動しておこう(図10)。

第2部

不調時でも諦めない!

リカバリーで完全復活!

新規インストールでまっさらな状態を作る